



十六井戸

十六井戸

境内の南の隅の岩窟中にある鎌倉時代の井戸。窟の中央に石造の観音菩薩像をまつり、その下方に弘法大師像を安置する。井戸の名は窟底に径七十cm、深四・五十cmくらいの井十六穴がおのの清冽な水をたたえているのになむ。

伝承では金剛功德水と名づけられ、観音菩薩が中興開山に夢に告げて曰く「末世の衆生信心つたなくして身に難病をうけて定業を終えずして死す、故に弘法大師に告げ、金剛功德水を以って加持し、この水を受け、薬を煎じて与えれば、悪病ことごとく蕩除けたのだが、鎌倉は数度の天災のためこの井埋れり、禪師願くはこの井を掘り出し掃除をなさば、清水湧き出で再び靈験あらわれん」と。夢から覚めた禪師がその通りにすると観音菩薩像が出現し、窟中の水を加持し衆生に施したところ靈験あらたかであった。

察するに、その数十六とは、十六（金剛）菩薩（薩・王・愛・喜・寶・光・幢・笑・法・利・因・語・業・護・牙・拳の各菩薩）を表現しているもので、その菩薩に供え捧げる水が閻伽あかという功德水である。

一部の歴史家には墓所と称する説もあるが、湧水地と十六という数字を思えば、墓所とは考えられない。

なお、扉右壁に黄檗宗万福寺木庵禪師の偈がある。